

米山新田と米山用水（堰溝）

～米山宗隆・米山宗持と円座の人々の苦闘のたまもの～

第5版 2025年

米山用水（よねやまようすい）は、三重県伊勢市横輪町（よこわちょう）の横輪川（参考①）の米山用水「頭首工」（とうしゅこう、河川から用水の取り入れ口、おせん淵の少し下流にある、写真①）から上野町を通過して、円座町（えんざちょう）まで続いている。全長約7.6kmある。円座町の人々は米山用水を『堰溝（ゆみぞ）』と呼んでいるが、ここでは米山宗隆（むねたか）と米山宗持（むねもち）の功績に敬意を表して、『米山用水』と記載する。



①横輪川の米山用水頭首工（右奥が取入れ口）

1 米山新田と米山用水

昔、沼木村円座（現在の三重県伊勢市円座町）は少し高台（海拔約24m）にあるため、1級河川の宮川（清流で知られてる、参考②）が村のすぐ隣に流れているにも拘わらず、低い所を流れている宮川から水を引けず、ほとんど荒地になっていた。そのため、米の収穫量は少なく、村の人々は麦やあわ（参考③）を食べて、苦しい生活をしていた。

米山宗隆（むねたか）

江戸時代の元禄2年（1689年）に、紀州藩（きしゅうはん）の侍士（じし、参考④）で、円座組の大庄屋（おおじょうや、参考④）でもあった米山家4代の米山宗隆（参考⑤）は村民の窮状を長い間見ていたので、決意を固めて、村の人々と力を合わせ、新田（しんでん、参考⑥）を拓くために約5.5kmの水路（参考⑦）の工事を始めた。

多年の刻苦の結果、7年後の元禄9年（1696年）に工事は完成した。水は上野町にある大熊山（おぐま（やま）、参考⑧）の谷川から引いた（資料1）。機械のない当時は、鍬（くわ）でみぞを掘り、高い所は削り、「もっこ」（参考⑨）で土を運び、低い所を埋め立てる重労働の仕事であった。

これにより県道伊勢南島線（なんとうせん）沿いの約7ha（ヘクタール）（参考⑩）の良田を得た。水路の水のお蔭で、新田には、稲が実り、畑には、茶やこうぞ（和紙の原材料となる植物）が栽培された。

米山宗持（むねもち）

1 130年以上経って、用水路は土手が崩れ、土砂が溜まり、雑草が茂って使えなくなっていた。水が入らないために、新田は3haしか米を作ることができなかった。

9代の米山宗持はその水路が荒れているのを見て、前の美しい水田にしたいと考えた。滋賀県の信楽（しがらき）にあった代官所（だいかんしょ）に工事を願い入れたが、近隣の灌漑（かんがい）を害するとして、許可されなかった。中世から農業用水をめぐる争いは日本各地で多発し、死活問題であった。

そこで、江戸に行き、江戸幕府の老中松平定信（まつだいらさだのぶ）に申し出て、やっと許可をもらった（資料1、参考⑪）。

2 文政12年（1829年）に村人と共に工事を開始した。横輪川より約7.6kmの水路を開く計画であった。



②現在の井堰（いせき） ③左側の横輪川からの取り入れ口

横輪川の上流に「井堰」(いせき、写真②)を作り、横輪川の水を分けて用水路に流す工事であった。井堰は堰ともいい、川の水をせき止める所で、水を他へ引いたり、流量を調整したりするために井堰の設置を行う。井堰は土や石を積んで作った。横輪川に並行して大熊山と日向山(ひなたやま)の麓に沿って溝を掘った。水路の高さは提灯(ちょうちん)の灯りで高さを決める「提灯測量」(参考⑫)で測った。

水路は前方にある小高い台法寺山(だいほうじやま)を越えないと、水が円座に流れないので、約150mのトンネル(隧道、ずいどう)を掘った。トンネルは現在のいせ上野台団地の近くで、サニードの下を横切って、通っている(写真⑫⑬)。方向磁石(参考⑬)と水準器(参考⑭)を使って、トンネルの方向や傾きを決めて、石ノミと槌(つち)だけで岩を削り、土を「もっこ」を使って外に運び出した。トンネル工事の灯りは「がんどう」(参考⑯)を使った。掘った所は木を組んで支えを作った。ほぼ同時代に行われた、榎田川(くしだがわ)から水を引いた立梅(たちばい)用水(円座町から直線で約20~30kmの距離、参考⑮、資料2)工事では、「岩一升、米一升」(資料3)ということわざが残されている。岩盤を貫いてトンネルを掘る過酷な作業に当たって、岩を一升分掘ると、米一升分の価値があるというものであった。

天保(てんぽう)2年(1831年)に、大きな苦難の末に、7.6kmにおよぶ長い水路がほぼできあがった。

3 しかし、1831年の7月に大雨が降り洪水によって、せっかく作った水路は切れて、トンネルも崩れ、水路のほとんどは使えなくなった。

この水害にも宗持はあきらめなかった。米山家の財産をすべて投げ出しかつ米山新田を担保(借金のかたに保証として差し出す物)にして借金をし、天保3年(1832年)にもう一度、工事を再開した。

トンネルには、愛知県の三河(みかわ)産の丈夫な石(参考⑰、写真④)を購入し、石材でトンネルを支えて強固なものにした。



④トンネルに使用された三河産の花崗岩の石材の一部(長さ約1m)

【現在:大水が出た時に、あふれた水を横輪川にもどす仕組みである「うてび」がいくつかの所にある。水路には、「うてび」の標識がある(参考⑱、写真⑤~⑦)。また、大雨の時、流量によって自動的に動く「転倒ゲート」も設置されている(参考⑲、写真⑧)。】



⑤第1うてび(全体)、左が横輪川



⑥第1うてび(上側が用水路)、水量が多いときは下側の水路で横輪川に戻す



⑦第1うてびの出口



⑧転倒ゲート:洪水時に転倒ゲートのステンレス製のシリンダーが下に作動しゲートが倒れる(前方中央にシリンダーがある)

4 様々な困難と不運にも拘わらず、米山用水は宗持と人々の苦闘と忍耐のお蔭でやっと完成した(資料なく完成年度不明)。新田の約10haと廃田の約27haに灌漑することができた。村人は用水を引いた水田で米作りに励んだ。

5 宗持はこの工事に私財1389両を投じただけでなく、円座村は新田を担保に1000両の大きな借金を背負い込んだ(1両=現在の数万円、参考⑳)。借金は村全体で保証する借金で、約72%の年貢を払う過酷なものであった。

その後、不運にも、天候の不順による大凶作(「天保の大飢饉」(てんぼうのだいいききん))(参考㉑)にあい、米の収穫量が減って、借りたお金が返済できなかった。返せないと、担保にした新田を取られてしまう。宗持は借金の責任を取って、天保10年1月23日(1839年)に自ら切腹して命を絶った(参考㉒)。

円座邨(村)墾田碑(えんざむらこんでんひ)と現在

1 それから37年後、明治9年(1876年)、11代の米山宗寿(むねとし)の時に、村中の人々の結束と努力と蓄財によって、やっと1000両の借金を返済することができた(参考㉓)。

明治18年(1885年)に、円座村をはじめ、三重県内および三重県外の有志の人々は米山宗隆、宗持の業績に感謝して、米山新田の真ん中に、円座村墾田碑を建立した(後述の「2 円座村墾田碑」参照、写真⑨㉔)。その功績を今も世の中の人々に伝えている。

沼木地区の先人の知恵や自己犠牲を厭わない心に、今の私たちは学ぶところが多い！



⑨円座村墾田碑と弁天さん(弁天さんは写真の左側)



⑩米山さんの説明を聴く(米山新田の解説案内板の前)



⑪円座邨墾田碑の拓本(米山氏所蔵)上部には元紀州藩主 徳川茂承(もちつぐ)の篆額(てんがく)が添えられている

2 昭和50年(1975年)に、サニーロード(南伊勢広域農道)の建設工事の際に、サニーロードの下を横切っているトンネルが埋まってしまわないように、伊勢市役所がトンネルをコンクリートで修理を行った(参考㉕)。



⑫台法寺山を貫く約150mのトンネル(隧道、ずいどう)の入口(前方奥)



⑬約150mのトンネルの出口(上野台からサニーロード沿いの反対側)



⑭トンネルを出たあと(いせ上野台付近)

3 円座町の人々は米山用水を『堰溝(ゆみぞ)』、頭首工を『奥の堰(おくのゆ)』(参考㉖)と呼んでいる。



⑮円座町・米山新田の用水入口付近(2023年6月7日)



⑯円座町・米山新田(2023年6月7日)

現在、米山用水は3面がコンクリート製の溝に改修されている(昭和57年～昭和60年(1982年～1985年))。工事の施工は伊勢市円座町の株式会社森組が行った。森組の(故)森 茂氏が山中隆雄の小説『横輪川悲歌』(資料4)のあとがきの後で、「偉大なる郷土の先覚者 米山多右衛門宗持を偲ぶ」を書いた。以下にその一節を引用する。

「土木事業を営む私は、たまたま昭和57年より昭和60年にわたり、この用水路改修工事(コンクリート水路にする)を行いました。現在の技術・機械力をもってしても大変でした。近代的な建設機械のない当時のこととて、想像を絶する難工事だったと考えられます。職業柄、筆舌につくせぬ苦闘を偲び感慨無量でした。

水の有無が稲作を、いや人の生死を左右するといっても過言でない時代、水利に恵まれぬ村を貧困から救おうと、米山宗持は横輪川より水路を開くべくその生涯をかけました。とても人間業と思えぬ非凡な着想と技術、生命を抛(なげう)つての行動には、ただただ驚嘆のほかありません。」

毎年、春の田植え前になると、円座町の住民は「出会い」(地域の協働作業)で、用水路の掃除や、土手の草刈りをして田に水を入れる準備をする。田植えが始まると、順番に用水路の見回りを行う。必要に応じて、水の流れを調節し、壊れたところあれば、修理をする。6月上旬ごろにはホタルが赤井山(あかいさん)側の用水路の周りを飛ぶのを楽しむことができる。

米山用水は近年になってコンクリートなどで改修・整備され、今日まで管理・利用されている。そのため、米山用水は江戸時代当時の姿のままではない。しかし、米山用水のルートを実際に歩いてみると、機械を全く使わずに、山野の平らでない荒れ地に約7.6kmの水路を切り拓く当時の工事がいかに困難であったかを体感できる。



①7 米山新田(2023年8月16日)、収穫間近

4 宗持が1811年に開いた曹洞宗(そうとうしゅう)の正覚寺(しょうかくじ)は米山家の菩提寺(ぼだいじ、先祖代々の墓がある寺)である。毎年、盆(8月15日の夕刻)に境内で「羯鼓踊(かんこおどり)」が行われる。『円座の羯鼓踊』は1964年に三重県の無形民俗文化財に指定された。

「かんこ踊り」(詳しい解説は資料5参照)

伊勢市円座町に伝わる民族行事で、正覚寺境内で盆(8月15日の夕刻)に行われる。かんこ踊りは羯鼓(かんこ)という鼓(つづみ)を打ち鳴らしながら踊るので「羯鼓踊」と呼ばれている。「かっこ」がなまって、「かんこ」になった。踊り手は頭に『シャグマ』という被り物をつけて顔までおおい、腰に『シモタ』と呼ぶ菅簍(すげみの)を着ける。羯鼓を腰につるし、両手のバチで打ち鳴らして、念仏の音頭(おんど)に合わせて踊る。『シャグマ』は白馬の毛でできていて、円筒形で先端はやや開いている。

『円座の羯鼓踊』は新盆を迎えた精霊(しょうりょう)・先祖の供養(くよう)や五穀豊穰(ごこくほうじょう)そして住民の安穩(あんのん)を祈願する踊りとして、継承されてきた。起源は慶安(1648～1652)の初期ごろといわれている。円座町の人々の熱意と努力によって、現在400年近く続いている。

米山新田開発の功績に対して、円座町民は米山家の先祖への敬意と感謝の念を持って羯鼓踊の当日に米山家を訪ねて、開始のあいさつをする慣習になっている。



①8 正覚寺境内



①9 かんこ踊り

参考

- 参考①: 横輪川: 清流で知られる1級河川の宮川の支流の一つで約15km。大雨による増水によって、最近でも伊勢市上野町地区などで何度も氾濫(はんらん)している。また、冬期には水量が少なく、上野町地区内を流れる川の部分で、地表より下を流れる水無川(みずなしがわ)となる。
- 参考②: 宮川: 三重県南部を流れている1級河川。伊勢市円座町は河岸段丘上にある。現在の伊勢市のある下流域では、明治時代まで洪水に耐える橋がなく、渡しを利用していた。(後に記載の資料6による)宮川用水(1957年～1966年)が整備されるまで、宮川の本流には1本も堰がなく、農業用水として利用されることはなかった。利水工事ができなかった要因は、川床が低く急流である地形的要因と宮川左岸が紀州領で右岸が(伊勢)神宮領という人文的要因を挙げている。
- 参考③あわ: 中国から伝わった小粒(直径約1.5mm)の穀物。明治の始めは米より栽培量が多かった。明治末期まで主食のひとつ。
- 参考④: 紀州藩: 徳川御三家(尾張徳川家、紀伊徳川家、水戸徳川家)の一つ。江戸時代に紀伊国(きのくに)、今の和歌山県と三重県南部)と伊勢国(いせのくに)の南部(1619年から紀州藩領)を支配した藩。55万5千石。藩主は紀伊徳川家。紀州藩の伊勢国は、「伊勢(勢州)三領」(松坂領、白子領、田丸領)と呼ばれた。伊勢国を治めるために松坂城に城代(じょうだい)、藩主の代わりに城を管理する家臣)をおいた。玉城町(たまきちょう)の田丸(たまる)に田丸代官所があった。田丸領は約6万2千石。
- 地土(じし)制度: 紀州藩は地域の有力者に対して、土着のまま、武士の身分として取り立てた。苗字帯刀(みょうじたいとう、姓を名乗り、太刀(たち)を腰に差す武士の特権)を許され、村々を統治した。武力を持ち、警察機能も持っていた。米山家は紀州藩の地土であった。
- 大庄屋(おおじょうや): 江戸時代の最上位の村役人。各村の庄屋を束ねた。
- 円座組: 田丸領にあり、組には、42ヶ村あり、1万2千石あった(資料1)。江戸時代の円座、上野、神薮だけではなく、広い地域を含んでいた。円座村は江戸時代には戸数50戸との記載がある。横輪と下村(しもむら)・菖蒲(しょうぶ)・上村(かみむら)・床の木(いすのき)(現在の矢持町)は江戸幕府直轄領(俗称として、天領ともいう)に属して、四日市代官所、信楽(しがらき)代官所の支配下にあった。
- 参考⑤: 米山宗隆: (資料1による)1621年～1702年。元々、姓は越賀(こしか、出身の(志摩市の)越賀が由来)で、名は多一郎であった。断絶していた米山家を継いだ時に改名した。父の越賀隆春(たかはる)が丹波(たんば)の綾部(あやべ)から1635年に円座村に隠退(いんたい)した時に、従ってきた。米山用水を開発する前に、紀州藩から命ぜられて、多気町にある五桂池(ごかつらいけ)の灌漑用溜池(かんがいようたためいけ、三重県で最大)を、大庄屋の三谷吉左衛門とともに元締(もとじめ)として、造った(1679年完成)(米山家所蔵の資料による)。
- 参考⑥: 新田と新田開発: 日本では、戦国時代に、各大名が国の力を高めるために、米の増産、農地開拓に取り組んだ。戦国時代末期から江戸初期に人口が増加したが、食糧が不足し、主食の米が必要とされた。江戸幕府や各藩のすすめのもと、役人や豪農や商人が中心となって、湖などの埋め立て、台地や谷間の湿地帯などの内陸部の荒れ地でも新田の開拓が行われた。新田開発は大規模な工事で大量の用水を導いて、それまで水利のよくなかった台地や扇状地の中央まで行われた。米山新田はこの例の一つである。江戸時代初期に全国で1800万石から後期には3000万石に、倍近く増えた。石高(こくだか)で土地の生産性を表した。1石(こく)はおとな一人が1年間で食べる米の量に相当。成人男性で1日に玄米5合。米の1石=10斗(と)=100升(しょう)=1,000合(ごう)=約180.39L。新田開発のためには、測量技術の進歩があった。新田開発は非常に大きな利益も期待できたが、開発の困難さから資金難のリスクもあって、投資した商人には破産する者もあった。また、新田は、古くからの農地より自然災害のリスクの高い土地が多くあった。
- 本田(ほんでん): 江戸前期の総検地によって決定された田、畑、屋敷。
- 新田: 江戸前期の総検地以降に開発された田、畑、屋敷。新田は本田に対する語。
- 墾田(こんでん): 新開発地は古くは墾田といわれた。(例)奈良時代の墾田永年私財法(こんでんえいねんしざいほう)⇒墾田は永久に私有地とすることを認めた法(743年発布)。
- 参考⑦: 米山宗隆が開発した約5.5km(資料1、7、8、9)(資料10では約4km)の水路は、現在「野田崎古溝(のださきここう)」(資料1)と呼ばれている。残念ながら、水路のルートは不明である。米山用水と米山新田の工事に数千両(後述の参考⑩)を使った。
- 参考⑧: 大熊山: 上野町の人「おぐま(やま)」と呼んでいる。神岳(かみがだけ)の麓付近にある小高い山。南から順に、おぐま、日向山(ひなたやま)、台法寺山(だいほうじやま)がある。今のいせ上野台団地のある場所は台法寺と呼ばれていた。
- 参考⑨: もっこ: 縄や竹・つるを編(あ)んで作った土砂の運搬道具。人が担いだり、背負ったり、手で持って運んだ。昭和の初期まで、土木工事は、この「もっこ」で土を一杯入れて、棒で担いで、運んでいた。
- 参考⑩: 1ヘクタール(ha)=100m×100m=10,000㎡=約1町。よって、7ha=70,000㎡。

参考⑪: 代官所: 江戸幕府が江戸幕府直轄領に設置した役所で、代官が統治した。今の滋賀県甲賀市の信楽(しがらき)に「信楽役所」と呼ばれた代官所があった。代官は近隣の灌漑を害する(中世から最も多い争い)と、許可を与えなかった。松平定信は宗持の誠意を理解し、調査を命じるとともに信楽代官にも意見を聞いた。もし、近隣の村に損害が生じたときは、米穀で補償することで近隣の村の同意を得させて、許可を与えた(資料10)。信楽代官所に行ったのは、頭首工のある横輪は江戸幕府領のためであったと考えられる。四日市にも代官所があったが、享和元年(きょうわがねん、1801年)以降、信楽代官多羅尾(たらお)氏の支配を受けて、四日市には出張陣屋が置かれた。

参考⑫: 提灯測量: 江戸時代から明治時代において、提灯を棒に立てて、夜間に目印として高低差を測量した。多くの人々が提灯を持って並び、提灯の高さを調節することにより測量した。

参考⑬: 方向磁石: 江戸時代後期に地理学者伊能忠敬(いのうただかか)は日本各地を測量して、精度の高い日本地図「大日本沿海輿地全図(えんかいよちぜんず)」を作成した。このとき、「小方儀(しょうほうぎ)」という方向磁石を使った。

参考⑭: 水準器: 江戸時代の水準測量は角材の1面に長いみぞを掘り、その中に水を注いで水平の基準面を定めた。この水準器は水盛り台(みずもりだい)と呼ばれた。一般に水準測量を「水盛り」と称した。

参考⑮: 立梅用水: 江戸時代に作られた灌漑用水で、1級河川の榑田川(くしだがわ)から水を引いている。三重県松阪市飯南町から多気郡多気町丹生(にゅう)までの水田へ水を運ぶ。全長約28km。2014年、国「登録記念物」、世界「かんがい施設遺産」に登録された。岩を人力で掘った素掘りのトンネルが残っていて、現在も水路として利用されている。

立梅用水の歴史: 元禄15年(1702年)、紀州藩の農業土木技術者の大畑才蔵(おおはたさいざう)が測量・原案策定⇒1808年、丹生で酒屋を営む侍士の西村彦左衛門(ひこざえもん)らが立案⇒紀州藩への請願⇒1820年3月着工⇒1323年2月完成。工事費約12,600両、人夫約247,000人、開田面積約160町(約160ha)。紀州藩の財政状況は良くなかったが、水田開発のために多額の資金が投入された。これより少し後(1829年)に開始された米山用水工事には、紀州藩は財政負担を全くなかった。

参考⑯: がんどう: 江戸時代に発明された携帯用ランプの一種。正面のみを照らし、外観は桶(おけ)状で中央にロウソクを固定した。

参考⑰: 三河の石(写真④): 愛知県三河の岡崎市は市内の山から切り出される良質な御影石(みかげいし)と技術力のある石工(いしく)職人で知られている。花崗岩(かこうがん、マグマが深い所で固まった深成岩の一種)は石材になると、御影石と呼ばれる。

参考⑱: うてび(写真⑤～⑦): 漢字は打樋。樋(とい)は水を送り流すもの。資料2では「ゆせき」と記載されている。

参考⑲: 転倒ゲート(写真⑧): 洪水時に流量が多いと、ステンレス製の油圧シリンダーが下に作動し、ゲートが倒れて水路の水を横輪川に戻す。(制作年月: 昭和57年(1982年)3月、松阪市の宇野重工株式会社製)

参考⑳: 1両の価値: 単純に比べることはできない。同じ江戸時代でも、時期や場所によって、比べる物の値段は異なる。また、基準として、何と比べるかでも大きく異なる。米の価格で比べると、1両は江戸初期で10万円、中期～後期で3～5万円、幕末で3～4千円という評価(山梨県立図書館の資料による)もある。あくまでも参考である。

1000両の借金: 村全体で保証する借金であった。「郷借(ごうがり)という。円座村の借金のうち、500両を相可(おうか)の大和屋西村三郎右衛門から借りた(資料1、古文書が米山家に保存されている)。工事は大和屋の直営工事として施工され、工事を円座村で担当した。証文(しょうもん)は、工事の結果増収となる27石8斗5升のうち、20石を永代年貢(えいたいねんぐ)として渡すという内容であった。約72%の年貢を払うという過酷なものであったが、円座村はそれほど切羽詰まった状況にあった。

参考㉑: 天保の大飢饉(てんぼうのだいききん): 江戸時代後期の1833年(天保4年)から1839年まで続いた。江戸時代三大飢饉の一つ。洪水や冷害があり、大凶作になった。米価・物価が高騰し、非常に多くの餓死者と病人を出した。百姓一揆や大塩平八郎の乱(1837年)が起こり、老中水野忠邦(ただくに)の天保の改革(1841年～1843年)につながった。

参考㉒: 米山宗持: 寛政2年8月23日(1790年)(資料1)～天保10年正月23日(1839年)。没年は天保10年(正月)であることを米山公美(きみよし)さんとともに米山家の米山宗持の墓石で確認した。資料1、9、10及び「米山新田開発跡」の石碑(墾田碑の右側にある)の没年1842年は誤りである。資料11では没年が天保18年となっているが、これも誤りである(天保は15年まで)。生年の寛政2年も資料11以前の米山家の資料では記述がない。没年時で53歳(資料1)も確かではない(数え年で数えても一致しない)。資料12(後に記載)の没年の誤りは2023年8月に訂正された。

参考㉓: 米山用水はサニーロードの下を横切って、上野町の日向(ひなた)に入り、アジサイの植えてある所と並行している(写真⑳)。米山用水は上野町の日向を通っているの、円座町と上野町の取り決めで、日向の田んぼに水を分けるために、水路の側壁に穴が数か所開けてある。現在、米山用水はサニーロードの下を3回横切っている。

参考㉔: 堰溝(ゆみぞ)、奥の堰(おくのゆ): 円座町では、近年、「堰(ゆ)」ではなく、「湯」が慣用的に使われてきた。円座町の方から、「ゆ」に対して、「堰」と表記したほうが良いのでは



㉔ 上野町日向を通る米山用水とアジサイ

との指摘を受けた。著名な民俗学者柳田國男の著書『故郷七十年』の中にも「堰溝(ゆみぞ)という灌漑用水の掘鑿(くっさく)」との記述がある。「堰溝(ゆみぞ)＝灌漑用水」と考えられる。ご指摘ありがとうございます。

頭首工にある工事銘板(めいばん)(写真⑳):頭首工は1959年に復旧工事が行われた。

工事名:昭和33年度災害復旧事業 円座頭首工復旧工事、竣工(しゅんこう):昭和34年8月15日、施工者:(伊勢市円座町の)森組森 茂。

⑳頭首工にある工事銘板



2 圓座邨(円座村)墾田碑(えんざむらこんでんひ)

円座村墾田碑(写真⑨⑳㉓)は明治18年(1885年)に、当時の円座村をはじめ上野村、津村、神菌(かみその)村、佐八(そうち)村、横輪村、下村(しもむら)、菖蒲(しょうぶ)村、上村(かみむら)、床之木(いすのき)村、沼木地区外の三重県内、および三重県外の有志の人々によって、米山宗隆、宗持の功績に賛同して、米山新田の真ん中に建立された。

墾田碑は地域の人々の生活を豊かにするために尽くした米山宗隆、宗持の功績を今も世の中の人々に伝えている。

碑の上部には元紀州藩主徳川茂承(もちつぐ)の篆額(てんがく、石碑などの上部に篆書体(てんしょたい)で彫られた題字)が添えられている。碑の文章は明治の漢詩人、衆議院議員で松阪市射和(いざわ)出身の矢土勝之(やづちかつゆき、号は矢土錦山)が作成した。以下は、この文を中村澄夫氏が解説したものを基にして、簡略化し、かつ現代語に直した(参考㉕)。(米山新田は1973年に伊勢市史跡に指定され、墾田碑の前に解説案内板(資料12)がある。)



㉒円座村墾田碑(前面)2025年2月18日

円座村墾田碑(要約)

伊勢の国・度会郡(わたらいぐん)の円座村は、昔、紀州藩主の治める地域であり、米山氏はこの土地の人々から信頼されている家の出身である。4代の宗隆さんは、この地域の荒れ地を嘆いて、荒れ地を開墾する決心をし、これに専念した。この村の人々も喜んで、この仕事に参加した。遠くから谷川の水を引き、50町(1町＝約109mなので、約5.5km)の長さの水路を作った。これによって、水田を5町(約5ha)と畑を2町(約2ha)得た。元禄4年(1691年)に、紀州藩は米山宗隆を褒めたたえ、褒美を与えた。

それから140年後、用水路は水路として役に立たず、田には雑草が生える状態であった。9代の米山宗持さんは、祖先のした事業が荒れ果てているのを見て、再興(さいこう)しようと働いた。石でできたトンネルを作ったが、これは長さが60間(けん)(1間＝1.82m、約109m、参考㉖)であった。灌漑用水路を直して整備することによって、新田が14町(約14ha)得られ、以前の田も含め、昔のように美しい田となった。これは横輪川を上手に利用した水利事業であった。天保2年(1831年)7月に、紀州藩主はすばらしい業績に対して、米山宗持に褒美として二人扶持(ふたりぶち、参考㉗)を授けた。

この文は米山宗寿(むねとし)さん親子の求めに応じて、矢土勝之(やづちかつゆき)が書いた。



㉓円座村墾田碑(裏面):上部に「有志輩」、その下に碑の建立に賛同した三重県および県外の192名の名前が刻まれている

参考⑮: 碑文において、内容が不明なところは省いた。大幅に簡略したところもある(米山家所蔵の墾田碑の拓本は写真⑪)。

書は明治の著名な書家である巖谷 修(いわやしゅう)による。号は一六(いちろく)。明治の三筆の一人と云われている。

参考⑯: 他の資料(1, 9)では、約150mとなっていて、一致していない。碑文で確認すると60間(約109m)となっている。

最近まで碑文は苔と汚れのため、ほとんど判読できなかった。2024年7月2日午前中に「弁天様協議会」の三役の方々が碑を洗浄した。現在(2025年2月)、判読可能である。三役の方々、ありがとうございました。

参考⑰: 二人の大人が1年間に食べる量の米が与えられた。

3 弁天さん

米山宗隆は水路(約5.5kmで、現在「野田崎古溝」(のださきこう)と呼ばれている)を工事の際、水路の安全を祈願するために、滋賀県の琵琶湖の北部に浮かぶ竹生島(ちくぶしま)にある宝巖寺(ほうごんじ、竹生島神社(ちくぶしまじんじゃ)とも呼ばれる)・都久夫須麻神社(つくぶすまじんじゃ)で祀られている弁才天(参考⑳)を勧請(かんじょう、参考㉑)した。米山新田の円座村墾田碑(写真⑨⑳)のすぐ後ろに祀られている。円座町の人々は親愛を込めて、弁天さんと呼んでいる。

参考㉒: 日本三大弁才天(竹生島、宮島、江ノ島)の一つ。弁才天は水に関係する神様で、七福神のひとり。元はヒンドゥー教の女神で河の神であった。河辺に居住すると云われていたので、水辺に祀られた。像は琵琶(びわ)、水瓶(みずがめ、すいびょう)などを持ち、音楽・芸術・財運などの女神として信仰されている。弁財天とも書かれる。

参考㉓: 離れた土地から分霊を迎えて祀ること

㉔ 弁天さん



参考資料

- 1) 西野儀一郎 「ふるさとの人物風土記、度会の巻」、『三重交通株式会社社内報』、p. 66-71、1982年5月、211号(三重交通株式会社)。米山氏と米山新田について詳しい解説がある。
- 2) 「立梅用水の歴史」、『立梅用水』、(水土里ネット 立梅用水)、<https://www.tachibai.jp>、(参照2025-2-8)
- 3) 「勢和村 立梅用水」、『三重のふるさと』、農村漁村振興: 第26号、平成12年12月、(三重県)、<https://www.pref.mie.lg.jp>、(参照2025-2-8)
- 4) 山中隆雄 『横輪川悲歌』、昭和61年。米山宗持の米山用水開発の苦闘の取り組みを小説で表した。山中隆雄は伊勢市の勢之国屋社長。
- 5) 沼木まちづくり協議会 「円座の羯鼓踊(かんこおどり)」、p.1-8、2025年、(沼木まちづくり協議会)、<https://numakijin.com>
- 6) 「伊勢平野の礎—平野の特異な歴史と宮川用水の資産性」、『水土の礎』、(一般社団法人 農業農村整備情報総合センター)、p1-2、<https://suido-ishizue.jp>、(参照2025-2-8)
- 7) 社会科副読本資料作成研究会編 「5地域のはってんにつくした人々」、『3・4年社会科 わたしたちの伊勢市』、p.106-113、2021年版、(伊勢市教育委員会)。写真とイラストで平易な説明があり、15代の米山公美(きみよし)さんのインタビュー記事も掲載されている。
- 8) 伊勢市教育委員会 「米山新田」、『歴史教材 ふるさと伊勢』、p.12、2020年、小学6年～中学3年向け。
- 9) 浜口主一 「ふるさと再発見 米山新田の墾田碑」、2010年9月11日、(中日新聞、伊勢志摩版)。
- 10) 伊勢市編 「6米山新田」、『伊勢市史』、第7巻 文化財編、第10章 史跡・名勝・天然記念物、第1節 史跡・名勝、p.578-579、平成19年(2007年)、(伊勢市)。
- 11) 三重県編 「米山宗持」、『先賢遺芳』(せんけんいほう)、p.131-132、1915年、(三重県)。国立国会図書館デジタルコレクションでも閲覧可能。
- 12) 伊勢市教育委員会 解説案内板「米山新田」、2012年設置。円座村墾田碑の前にある。

沼木学びウォーク：「米山用水（ゆみぞ）のルートをとる」

沼木まちづくり協議会 沼木こども自立塾委員会とイベント委員会の共同企画

2022年12月11日(日)8:30~12:00実施

米山用水(堰溝、ゆみぞ)は、三重県伊勢市横輪町の横輪川の米山用水頭首工(とうしゅこう、河川から用水の取り入れ口、おせん淵の少し下流)から上野町を通って、円座町まで続いています。全長約7.6kmあります。全ルートを行くと、大人でも3時間以上要します。また、危険と思われる所(写真⑮)もいくつかあります。そのために、当日は歩いて見る所と車で移動する部分を組み合わせて、米山用水のルートをとりました。

8:30:①旧沼木中学校グラウンド集合⇒みどり保育園バス&レンタカーで横輪川の①米山用水頭首工へ
 ⇒9:00ごろ:ウォークスタート⇒転倒ゲートまで歩く⇒②少し戻って宮川パークランド付近の倉ヶ谷橋(くらがたにはし)を渡る
 ⇒車⇒③日向(ひなた)からウォーク再開⇒④上野小学校近くを通る⇒⑤米山新田⇒⑥円座町壱田碑まで歩く。
 米山用水についての米山公美(きみよし)さんの説明⇒⑦車で沼中グラウンド(12:00解散)



⑮サニードロードから橋を渡り頭首工へ



⑮米山用水の取入れ口



⑦前方に大きい岩。土砂と落ち葉の流入を防ぐために鉄板が敷かれている



⑮倉ヶ谷橋

謝辞

この解説は主に西野儀一郎著の資料1をもとに作成しました。西野儀一郎著の資料なくしてはこの解説を書くことはできませんでした。

(故)西野儀一郎さんに深く感謝いたします。

西野儀一郎著の資料1の出典については不明でしたが、三重県立図書館に調査相談を行った結果、三重交通(株)の社内報の可能性があると指摘を受けました。三重交通(株)に尋ねた所、出典の確認が取れました。三重県立図書館の職員の方々および三重交通(株)の職員の方、ありがとうございました。

また、資料の提供、原稿の校正などをいただいた円座町の方々および沼木まちづくり協議会のスタッフの皆さん、ありがとうございました。

作成責任者: 沼木まちづくり協議会 立花和也

初版 2023年2月25日

第4版(レイアウト変更および増補) 2024年1月23日

第5版 2025年3月3日



沼木まちづくり協議会

〒516-1104 三重県伊勢市上野町823

(旧沼木中学校)

TEL: 0596-39-7240 FAX: 0596-39-7241

メールアドレス: info@numakijin.com

ホームページ: <https://numakijin.com>